

## 初版をお買い上げいただいた方へ訂正のお知らせ

日頃は弊社刊行書籍をご愛用いただきまして、誠にありがとうございます。

『英文法の核』につきまして誤りがございました。内容を訂正するとともに、謹んでお詫び申し上げます。また、第2版にて補足説明を加えているところがございます。誠に恐縮ですが、ご訂正・ご確認のうえ、ご利用くださいますようお願い申し上げます。

### 《加筆》

p.32 第1章 Guideline【1】SV(+A)型

Sになるのは名詞(相当句)、Vは…(略)…実際の運用に役立ちます。意味上必要不可欠ではない副詞(句)は(M)と表します。

たとえば He lived では非文法的ですが、…(略)…でしたね(⇒P.21)。ですから in Chicago はAと考えます。

p.41 第1章 a) O=C(の状態)にする(作為動詞)

make, keep, leave, call,…(略)…この形をとることができます。(015は文の骨格はSVC、to内部のkeepがVOCの形をとっています。)

p.258 コラム「シャドーイングの効用」加筆

p.324 コラム「中間話法(抽出話法)について」加筆

⇒加筆したコラム全文はこの文書の3～4ページに掲載しております。

### 《訂正》

p.32 第1章

例文001 Our train will arrive soon.

(訂正前) SVA

(訂正後) SV(M)

例文002 A journey of a thousand miles must begin with a single step.

(訂正前) SVA

(訂正後) SV(M)

p.46 第1章

例文 002 He proved an honest man.

(訂正前) SVO

(訂正後) SVC

p.93 第3章 TOPIC09

be to+原形の用法において運命を表す場合は通常過去時制を用いるため、例文を以下のよう  
に訂正致します。(問題演習編をお持ちの方は、p.99 Advice16 で詳細をご確認ください。  
い。)

(訂正前) I don't know what is to happen to us.

(我々にどのようなことが起こるかわからない。)

(訂正後) I didn't know what was to happen to us.

(我々にどのようなことが起こるかわからなかった。)

p.159 第5章 TOPIC18

(訂正前) ②They could have lived here.

(訂正後) ②They could have lived here happily.

p.254 第8章

重要部分のアミ掛けの位置に訂正があります。

例文 360 This is the very best reference book for the study of English.

(訂正前) the very best reference

(訂正後) the very best reference book

p.297 第10章

表記が p.300 と異なっておりましたので、以下のように訂正致します。

(訂正前) neither \_ nor~ 「\_も~のどちらも…ない」

(訂正後) neither \_ nor~ 「\_も~もどちらも…ない」

誤った表記を致しましたことを、深くお詫びし、訂正致します。ご迷惑をおかけして誠に  
申し訳ございません。

## ~COLUMN~

### 【1】シャドーイングの効用

シャドーイングとは、耳から聞こえてくる音声に遅れないようにできるだけ即座に声を出したり繰り返したりしながらついていくという作業です。最終段階の音読と共通する効用は、どちらも内的反復（記憶に必要）を声に出して行うことで語彙や文法項目を記憶しやすくさせることです。音読とシャドーイングを両方行くと、語彙のかたまりや文構造・文法を瞬時に認識できるようになります。もちろん、理解した文法を内在化させるのが目的なので、本書による文法理解をベースにした上で行いましょう。ただ声を出していればよいというわけではありません。

一方、異なる効用もあります。音読は前に述べたように最終的に読解力向上につながるものですが、シャドーイングならではの効用は、音声知覚の自動化によりリスニング力が向上することです。音読でもリスニング力は向上しますが、あくまでも「発音できない音は知覚できない」という段階の話です。それ以上の段階におけるリスニング力を鍛える最高の手段がシャドーイングなのです。シャドーイングは自分では速度調整できませんから、かなりストレスのかかる作業となります。比較的易しい文から始める方が良いでしょう。（本書の基本例文を出発点とすればよいと思います。）

注意として、音読・シャドーイングは 30 分も続けて行うものではありません。脳が活性化しなくなるからです。脳の働きから考えると 10 分から 15 分を 1 回として、時間をおいて繰り返す方が有効です。

⇒参考文献：『シャドーイング・音読と英語コミュニケーションの科学』（門田修平著、コスモピア）

### 【2】中間話法（描出話法）について

本書では話法を扱っていませんが、その理由は直接話法（He said, “I am hungry.” のような形）と間接話法（He said that he was hungry. のような形）の書きかえには何の意味もなく、最近の入試で問われることもほぼなくなったからです。

しかし物語の読解において中間話法を含む文章が出題され、そこが問われるということがあるので、これだけは押さえておきましょう。中間話法とは、引用符なしに登場人物の言葉や考えが地の文で書かれる形です。出来事を客観に記述する間接話法では読者の視点は外部に置かれますが、中間話法で登場人物の思いが地の文で書かれると読者の視点は登場人物のものとなり、物語内部にいるような臨場感を与えるという効果があります。（だから描出話法ともいうのです。）物語を読んでいて、書き手のものとは思えない視点で書かれた地の文を見たら、中間話法かな、と考えてみましょう。そうであれば直接話法のように

訳すのが良いでしょう。東大では頻出です。

たとえば、可愛い同級生の女の子が前を歩いている。男の子は彼女と話す場面を夢想している。その後が下線部訳で、

***Why didn't she turn and smile and call to him, saying, "Don't you like my company?"*** (以下省略)

ここで「なぜ彼女は振り向いて彼によびかけなかったのか」と筆者が読者に疑問を提示するわけですね。ここでは男の子の内的独白が地の文で書かれていると見破り、彼の視点から直接話法で訳します。(解答例：「振り向いて、にこりと微笑んで、「一緒に行かない？」とよびかけてくれないかなあ」と彼は思った。)